

文化情報誌

# たわわ

2019 No.107

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。





## 岡村工房 岡村昭男さん

平塚に縁ができたのは大学生の頃です。

藤田昭子さんという平塚在住の造形作家さんが大学の先輩で、その人と知り合ってから「大学なんか行かないでうちに来なさい」と言われて、週に三日ぐらい藤田さんを手伝っていました。藤田さんは土を素材に造形を行っている作家さんです。魅力があって面白いなと思ったけれど僕には彼女のようなものは作れないと思いました。

大学を卒業してから茨城県にある笠間焼の窯で二年間研修をして、その時に陶芸家になりたいと思いました。笠間は江戸時代から続く古い焼き物の窯があると同時に、つや消しをした白の新しい釉薬ができたりして若い人も多く入り込んでいた場所です。古くからの伝統的な焼き物と新しい工芸品のような焼き物との両方が存在していて、魅力的に思えました。

その後、北鎌倉の窯で二年間勤務してから平塚に窯を開いています。



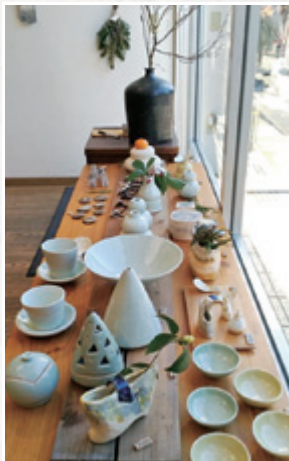
造形教室の子どもたち

創作のかたわら、工房を活用して妻と一緒に造形教室をして子どもに教えたり、大人向けの陶芸教室をしたりしているうちに、公民館主催の陶芸教室の講師をしないかと声をかけられました。それがきっかけで、今でも市内のいくつかの公民館で陶芸教室を続けています。

その縁もあって夏休みには子ども向けの陶芸教室をやることになりました。最初は少なかったんですが今では増えて十か所ぐらいで教えています。もう十回以上やっているから、十年は過ぎたのかな。

五百グラムぐらいの粘土を子どもの好きに作らせてあげて、釉薬見本のうちから好きな色の釉薬をかけて焼いてあげます。自由に作るから、くっつけたものがとれやすかったり、粘土の時は柔らかいんだけど焼くとぼろっと取れちゃうようなものが出来上がったりしますが、なるべく本人が作ったとおりに焼いてあげるように気を付けています。

ここ岡村工房では娘も息子も陶芸家をしていて、家族のうち僕と妻と娘と息子の四人が陶芸家として活動しています。家族みんな感性が違うから、それぞ



岡村工房展の写真

れ好きにやっていて作風も違います。教室に通う人たちと同じで、子どもたちにも今まで「これをやったらダメ」とか「作ったらダメ」とか、そういうことは言ったことがありません。作るものに関しては自由にやった方がいいと思っています。

去年は「岡村工房展」というのを家族でやりました。企画をまとめたり案内状を作ったりするのは息子たちです。家族で役割分担しながらやりましたが、感性が違うのでケンカしながらでした。

今、この工房の裏に新しい工房を作っていますが、どんな風にするかもそれぞれ主張があります。娘や息子は古いものが結構好きで、ちょっと骨董品みたいな資材をどこかでもらったりして壁に貼り付けたりしたいみたいです。特に娘は、自分が作るものもちょっと古めかしい雰囲気のものが多いです。



青磁の作品

僕は磁器を作ることが多いです。使えるだけけれど飾っておいても存在感があるようなものを作りたいというイメージを持っています。青磁なんかも作りますが、青磁は磁器みたいに決まった土がないので、青磁のための土の配合を全部自分で考えて作らなきゃいけないのが難しいです。焼く前に作品にかける釉薬も配合を考えて、試行錯誤を繰り返しています。

自分の作品を作る時間は教室の合間にやりくりしているのですが、窯を開いた当初からこの工房は人が集まるオープンな工房にしたいと考えていました。

ここで作る人たちはそれぞれ自由で、毎回違うものを作る人もいれば同じようなものばかり作る人もいます。子ども向けの陶芸は造形教室の方で月に一度は教えているのですが、陶芸教室に通う親御さんに連れられてくる小学生も大人と一緒に自由になんか作ってたりします。

ここは陶芸教室というよりは粘土遊びの延長のような大人の造形教室みたいな側面もありますから、やりたい人の自由な要望になるべく対応したいと考えています。

これからも人が集まって自由な感性を発揮する場所を目指したいです。



### ●娘・朝子さんと息子・友太郎さんのお話

今内装作業をしている新しい工房は窓を大きく取っていて、目の前に畑が広がっていてとても景色がよく、開放感があるんです。人が集まりやすい居心地のいいところにして、来る人の創作意欲が湧くようになるといいですね。

### 【プロフィール】

#### 岡村昭男（おかむら あきお）

1947年山口県生まれ。横浜国立大学卒業後、笠間焼を学び、鎌倉明月窯勤務ののち、平塚市の出縄に築窯1984年～2016年まで実施した一翠堂（鎌倉）の個展等、創作活動を行うとともに工房にて造形教室及び陶芸教室を開催する。2019年6月1日～30日「小田原城アートNOW2019」に出品、6月18日～23日「岡村工房陶芸教室展」（平塚市美術館）では教室の生徒の作品展示と共に家族の作品も展示される。



## ひらつかの文化財を知ろう⑱

### 北金目神社

市内の北西、東海大学の南に隣接した北金目地区に北金目神社は鎮座します。元は熊野社といい、江戸時代後期に書かれた『新編相模国風土記稿』には「村の鎮守とす。神体木造。・・天正19年11月。社領二石の御朱印を賜う。幣殿。拝殿。神楽殿等あり。」と記されています。現在、本殿は慶応4年(1868)に造られた覆殿にすっぽりと覆われ保護されています。

本殿は春日造りという造り方で、県内でも珍しく、市内では唯一の建物です。細部の造り方の特徴から、江戸時代の前期(17世紀の中頃～後半)の築造で、市内最古の神社建築と考えられています。こうした特徴から、平成6年(1994)に平塚市の重要文化財に指定されています。

近年、屋根の傾ぎや折損が激しいことから、平成30年度に修理することになりました。修理は、建築専門



屋根の破損状況

の文化財保護委員の先生の指示のもと、専門の宮大工によって、解体、修理、復元に亘って詳細な記録と、慎重な工事が行われました。この結果、本殿には、当初、彩色の模様が描かれていましたが、後に、赤・黒で塗りつぶしたことが分かりました。また、周囲の神社を合祀した棟札を含めて、11枚の棟札が保存されていました。最も古い棟札は、若宮八幡宮の寛永5年(1708)のものがありました。ですが、北金目神社本殿の古さの分かるものは残っていませんでした。

文化財の修理は、簡単に資材を取り替えたり、上から色を塗るといったわけにはいきません。使える材料は継当てをしてできるだけ古い材料を使ったり、修理した箇所が将来分かるようにしておいたりしながら、文化財を引き継いでいく努力と技術が必要なのです。近年は、こうした技術を持った職人が減少し、北金目神社の修理でも、滋賀県から職人を呼んで修理にあたりました。文化財の保存の難しさを感じます。



修理後の北金目神社本殿

## リトアニアだより(7)

今回紹介するのは、第二次世界大戦以前にリトアニアと日本の懸け橋となった4名を通して、日本とカウナスの関係を紐解くドキュメンタリー映画「カウナス スギハラを、日本を想う」です。

懸け橋となった1人目は皆さんご存知の福澤諭吉です。彼は日本人で初めてカウナスについて言及しています。1862年には日本から36名の使節団と共に列車でリトアニアを旅し、カウナスにも立ち寄ったことが彼自身の日記に記されています。

2人目は、1905年に日本について初めてリトアニア語で本を書いたステポナス・カイリス。彼は大國ロシアを打ち負かした遠くの小国日本に魅了され、自らも独立を求めようリトアニア人たちを鼓舞したそうです。

3人目は、旅するジャーナリスト、マタス・シャルチュス。彼は日本を数回訪れ、その後1929年には、なんとカウナスから日本へバイクで向かうことを決意しました。

そして、最後の4人目は広く



映画のポスター

世界中にその功績が知られている外交官・杉原千畝。ユダヤ人達にビザを発給した勇氣ある彼の行動は、今日に至るまで両国を強く結びつけています。

4月13日(土)、平塚市美術館ミュージアムホールにて制作者であるオウレリウス・ジーカス教授をお迎えし、上映会とトークショーを開催しました。ジーカス教授は、カウナス市内の大学でアジア研究をしており、日本への留学経験もある、リトアニア国内随一の日本通です。

昨年10月にリトアニア共和国首相が初来日した際には、通訳として同行されました。

ジーカス教授からは日本での撮影の様子や制作の裏話が披露されるとともに、100名を超える来場者からは様々な質問が飛び会場は大いに盛り上がりました。

平塚市は、今後もカウナス市との交流を進めていきます。



上映会及びトークショーの様子



カウナス市旧市庁舎

# 足もとの星座たち 第7回

今回は夏の夜空で存在感を放つ、へび座とへびつかい座、ヘルクレス座をご紹介します。

へび座とへびつかい座は合体していて、まるで一つの星座のようです。それもそのはず、元々は一つの星座だったと伝えられています。将棋の駒のような形のへびつかい座を中心に、その西側にへび座の頭部が、東側にへび座の尾部があります。へび座は一つの星座なのに二つに分割されてしまっている珍しい星座なのです。

へびつかい座はギリシャ神話に登場する名医アスクレピオスの姿を表したものです。死者すらも生き返らせるほどの腕を持ったアスクレピオスでしたが、死の国に死者が来なくなって困り果てた死の国の王プルートーが大神ゼウスにアスクレピオスの処分を迫ったため、あえなくゼウスの雷に打たれて死んでしまい、天に上げられ星座になりました。なぜそのアスクレピオスがへびつかいになったのかと言えば、古代では医師が蛇の毒を薬として用いるなど、医学と蛇の間に深い関係があったからです。そのため現在でもヨーロッパの国々の救急車や薬局の看板に蛇と杖（アスクレピオスの杖）が描かれていますし、世界保健機構（WHO）の旗にも蛇と杖が図象化されています。

ヘルクレス座は、その名の通り、ギリシャ神話の英雄ヘラクレスの姿を表した星座です。女神ヘーラーの呪いによって妻と子を殺してしまったヘラクレスは、その罪を償うためにいわゆる十二の冒険を行うこととなります。春の星座であるしし座やかに座、うみへび座、夏の星座であるりゅう座は、それぞれヘラクレスに退治された怪物が天に上げられ星座となったものです。星座絵のヘラクレスは、退治したライオンの皮を頭からかぶり、左手には棍棒を、右手には毒蛇ヒドラを持つ姿で描かれています。

ヘルクレス座には、有名な球状星団M 13があります。球状星団とは100万個を超える星々がボール状に集まった天体で、M 13は数ある球状星団の中でも特によく見えるものの一つです。街中でも大きな望遠鏡をつかえばボールとした姿を見ることができます。7～8月に4回ほど行われる博物館の「星を見る会」でも空の条件が良ければ見られるでしょう。



へび座&へびつかい座の絵タイル



ヘルクレス座の星座絵タイル



ヘルクレス座の球状星団M13

へび座&へびつかい座の星座絵タイルは紅谷町パールロードの西側に18枚、ヘルクレス座の星座絵タイルは銀座通りの西側に2枚、設置されています。これからの季節、雨の日が多くなりますが、地上の星座絵を探して夜空に思いを馳せてみてください。

(平塚市博物館学芸員)

## 博物館主催の星を見る会に参加しませんか？

7月19日(金) 「木星、土星、夏の星を見よう」 8月1日(休) 「木星、土星、夏の星を見よう」  
8月7日(水) 「伝統的七夕を楽しもう」 8月22日(休) 「夏の天体を楽しもう」

■それぞれ19時～20時30分。申し込みは不要です。当日博物館にお越しください。



## 平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。

■基金に御寄附いただいた方々 (2019.5.31現在)

2月19日 湘南ステーションビル株式会社  
3月29日 しんわ本人自治会

平塚市文化振興基金は、小学校アウトリーチ事業、ひらつか音楽のおくりもの、第九のつどい、市民合唱祭、各種団基事業など、市民の皆様が触れる多くの事業で活用されています。



発行

平塚市文化・交流課

〒254-8686 平塚市浅間町9-1 電話 0463-32-2235 FAX 0463-21-9756

令和元年(2019年)6月15日発行 e-mail bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp ホームページ [http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/bunka/page-c\\_00216.html](http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/bunka/page-c_00216.html)